

## 平成 25 年度 健康教室

期間：平成 25 年 5 月 14 日～11 月 12 日

場所：大阪河崎リハビリテーション大学  
河崎記念講堂

統括責任者：佐竹 勝

統括副責任者：石川健二（文責）

運営担当者：高野珠栄子、上島 健、  
武井麻喜、平本憲二、  
嶋野広一、水野貴子

事務局：南川京子、中務朋子、田中一成

### 1. 健康教室の目的

地域住民がいきいきと健康的な生活を送るため、健康に対する意識の醸成や集いの場を設けることで地域貢献の役割を果たす。

### 2. 平成 25 年度健康教室スケジュール

プログラム内容：今年度テーマは「地域で支える認知症の予防啓発」と題して企画した。(表)

### 3. 結果

#### 第 1 回

1 部では岡田教授による「胃がんの予防と対策」の講座を 2 部では貝塚市健康福祉部の荒木保健師より「認知症予防啓発活動の取り組みについて」をテーマにそれぞれお話しいただいた。参加者から認知症に関する身近な質問や胃がんについて興味を示す方も多く、意欲的に聴き入る姿

(表)

開催	日 程	ミニ講座 (30 分)	講師	活動内容 (60 分)	場所
1	5 月 14 日	胃がんの予防と対策	作業療法学専攻 岡田守弘教授	認知症予防啓発活動の取り組み 貝塚市保健師 荒木佐和子先生	記念講堂
2	6 月 11 日	あなたは右脳派？左脳派	作業療法学専攻 水野貴子助教	体力測定 (身体機能)	記念講堂
3	7 月 9 日	陶芸に親しむ	作業療法学専攻 嶋野広一助教	型造りから素焼きまで	多機能実習室
4	9 月 17 日	「認知症」と「物忘れ」	言語聴覚学専攻 亀井一郎教授	脳力測定 (認知機能)	記念講堂
5	10 月 8 日	高齢者のきこえ	言語聴覚学専攻 馬屋原邦博准教授	釉薬から本焼きまで	多機能実習室
6	11 月 12 日	嚥下障害を予防しよう 年間総括	水間病院管理栄養士 田中遥佳先生	お楽しみ会・談話会	多機能実習室

勢がみられた。最後に年間スケジュールをお渡しして、今年度も継続的に参加していただけるように伝えた。

#### 第 2 回

1 部は水野助教による講座「右脳・左脳の話」、2 部は文部科学省新体力テスト実施要項に基づき体力測定 (握力、上体起こし、長座位前屈、開眼片足立ち、10m 障害物歩行) を実施した。その後、参加者に対し佐竹室長より、今年度健康教室開催にあたっての挨拶を行った。

#### 第 3 回

嶋野助教から陶芸の土練りと成形の仕方を学んだ。参加者全員が陶芸の作品を作り、時間内に作品を作り終えることができた。当日、貝塚市内の中学生も社会体験として健康教室に参加し、陶芸の作成を参加者と共に行った。

#### 第 4 回

第 1 部は亀井教授による講座「認知症と物忘れについて」、第 2 部はミニメンタルステート検査 (MMSE) を使用しての脳力測定を実施した。講座では認知症の関心が高く参加者から予防策について多くの質問があった。認知症が身近な病気であり、早期の予防が大切であると実感されていた。

## 第5回

ミニ講座では馬屋原准教授の講演「高齢者のきこえについて」は、参加者からの質問も多くとても興味を持って頂けた。陶芸作品づくりでは素焼き作品が割れることはなく、バリ取り、撥水材加工、施釉を行った。最後に作品を手にして記念写真を撮った。

## 第6回

「嚥下障害を予防しよう」をテーマに水間病院の田中管理栄養士からお話があった。体験として、嚥下食とトロミ茶を試食した。内容は嚥下のしくみから調理の工夫、食事形態、食事前の体操等で質疑応答も活発に行われ、参加者の興味関心が伺われた。その後、参加者へは陶芸作品、これまでに実施した体力及び脳力測定結果を持ち帰っていただいた。最後に佐竹室長から締め括りの挨拶を行った。

## 4. まとめ

今年は「地域で支える認知症の予防啓発」をテーマとして開催した。第1回では貝塚市健康福祉部の荒木保健師より「認知症予防啓発活動の取り組みについて」をテーマにお話し戴いた。また、第4回にも亀井教授から予防策について講義してもらった。いずれも参加者からの反響が大きく認知症への関心の高さが伺えた。また毎回の健康チェックや体力測定、脳力測定など、参加者自身の身体状態を確認することができた。趣味的活動としての陶芸は毎回人気があり今回も参加者が多かった。最終回では「嚥下障害を予防しよう」のテーマで水間病院の田中管理栄養士に講義いただいた。そのなかで恒例のお楽しみ会として、お菓子感覚で食べられる嚥下食の体験を行った。食感の良さや飲み込み易さが体感できた。

参加者アンケート結果では、講座や陶芸等に

好評の声が寄せられており、また本学への要望として、貝塚市のためにも行政と一体感をもって、地域のコミュニティー的役割を担ってほしい等の声も寄せられた。今後も広い視点から健康に関するテーマで教室を開催していきたい。

平成 25 年度健康教室の参加人数

	男性	女性	参加人数
第1回	2	14	16
第2回	4	9	13
第3回	3	10	13
第4回	8	11	19
第5回	5	14	19
第6回	6	13	19
合計	30	69	99

年間の地区別参加人数

馬場	津田南町	三ツ松	名越	森	久保	二色	脇浜	清見
35	2	6	3	6	5	1	1	5
脇浜	泉佐野	水間	王子	沢	岸和田	石才	不明	計
2	1	5	12	4	2	2	7	99

## アンケート結果

実施日：平成 25 年 11 月 12 日（回答者 17 名）  
平均年齢：70.5 歳

## 1 ミニ講座について

Q1. 配布資料やミニ講座は日常生活で役にたちましたか。

- ・大いに役に立った (15) ・まあまあ (1)
- ・役に立ったとはいえない (0) ・未回答 (1)

Q2. ミニ講座のうち特に役立ったテーマはどれですか（複数可）

- ・嚥下障害を予防しよう (21)
- ・高齢者のきこえ (13)
- ・認知症を予防しよう (10) ・陶芸に親しむ (6)
- ・胃がんの予防と対策 (3)

Q3. 今後のミニ講座でご希望のテーマがあれば教えてください。

- ・エンディングノートはどのように使えばいいのか、きこえとか目のこととか。
- ・体操を取り入れてもらいたい。
- ・体力維持、残存機能を十分に生かせる方法

等々。

- ・認知症予防の講座をうけてないのでうけたいです。
- ・整体について興味があり、姿勢のもつ病との関係が学びたいです。

2 プログラム内容 今年度は「地域で支える認知症の予防啓発」と題して企画しました。

Q4. どのプログラムがよかったですか（複数可）

- ・嚥下食の試食体験（11）・脳力測定（10）
- ・体操（6）・陶芸（6）
- ・貝塚市認知症サポーター講演（5）・体力測定（5）
- ・散歩・散策（4）

Q5 これからの健康教室に参加を希望しますか。

- ・できれば参加したい（14）・テーマによる（2）
- ・見合わせたい（0）・未回答（1）

3 本学について

Q6. 本大学のイメージについて教えてください（複数可）

- ・雰囲気がい（10）・環境がい（9）
- ・学生の態度がい（7）・教員の評判がい（7）
- ・設備が充実（5）・有名である（3）
- ・教育方針がい（2）・伝統がある（1）

Q7. 知り合いに本大学の入学をすすめたいですか

- ・是非とも勧めたい（11）・微妙（2）
- ・薦めるまでもない（0）・未回答（4）

Q8. 本大学に今後期待することについて、どのようなことでもお書き下さい。

- ・貝塚市公報で初めてしりました。もう少し大きく宣伝してほしいです。来年は初めから参加します。
- ・より有名になってほしいです。
- ・認知症予防にご尽力いただきたい。
- ・楽しい1年でした。
- ・春先が来ると新しい学生さん遠くから来られる人によく会います。その時はほこらしく感じます。
- ・地域に密着した啓発等をして下さい（健康的

に生きていく為に)

- ・親切、丁寧、毎回楽しみにしています。
- ・老後の健康増進、維持についての地域の相談相手になっていただきたい（リハビリを利用して）
- ・健康に対する講座をもっと受けたいです（5回目と6回目しか私は受けていなかった）
- ・この地には大学が唯一です。最も期待される教育施設ですので、今後ともぜひ、貝塚市のためにも行政と一体感をもって、地域のコミュニティ的役割を担ってください。おねがいします。
- ・大学祭にも参加してみたいです。



第1回ミニ講座



脳力測定



陶芸に親しむ

## 平成 25 年度 地域の子育て支援

実施日：平成 25 年 10.20、12.1、平成 26 年 1.26  
 場所：大阪河崎リハビリテーション大学  
 総括責任者：寺山久美子（副学長）  
 運営委員：木村秀生（文責）、野村和樹、  
 馬屋原邦博、平本憲二  
 高倉利恵  
 事務局担当：田中亚以子

### 1. 子育て支援室の公開講座の目的

- 1) 本学の地域貢献活動の一環
- 2) 障がい児、保護者の支援、相談
- 3) 地域の関係諸機関と本学とのネットワークや連携の強化をはかる。
- 4) 学生に対する地域リハビリテーション教育実践の一環とする。

### 2. 対象

障がい児者、保護者、療育・教育・行政等の関係諸機関職員、一般市民、本学学生等

### 3. 平成 25 年度テーマ

「親子で学ぶ」3回シリーズ

#### 第1回

日時：2013 年 10 月 20 日（日）13:00～15:00

演題：「姿勢と動き」

～歪み（側湾）が身体に与える影響～

講師：高倉利恵 理学療法学専攻講師

参加者：20 名（大人 9 子ども 5 学生 6）

学生ボランティア（会場設営、託児等）12 名

#### 第2回

日時：2013 年 12 月 1 日（日）13:00～15:00

後援：貝塚市教育委員会

演題：「発達障害児の読み書きの学習支援」

講師：正高信男 京都大学霊長類研究所教授

参加者：110 名（大人 53 子ども 24 学生 33）

学生ボランティア（会場設営・託児等）22 名

#### 第3回

日時：2014 年 1 月 26 日（日）13:00～15:00

後援：貝塚市教育委員会

演題：「障がい者福祉法の推移と就労支援の現状」  
 ～障がい者を支える法システムと働く場について～

講師：谷口英治 作業療法専攻教授

高野珠栄子 作業療法学専攻准教授

参加者：28 名（大人 21 子ども 5 学生 2）

学生ボランティア（会場設営、託児等）13 名

### 4. まとめ

- 1) 本学学生を除く外部からの延べ参加者が 3 回の講座を合わせて 117 名（大人 83 子ども 34）となった。小児領域での本学の取り組みへの地域のニーズが広範に存在する事を示すものと考えている。
- 2) 講座開催を通じて地域の障がい児者施設、保護者団体との関係が広がった例が複数あり、教員の講師派遣や学生ボランティア派遣等の要請もあった。このようなニーズに応えることで小児領域での本学の地域貢献や地域のネットワークへの参加を更に進めたい。
- 3) 堺市以南の多くの自治体から療育及び行政関係者の方々の参加が見られたのも今年度の特色である。貝塚市教育委員会の後援もいただくことができた。小児領域での本学と関係諸機関との連携の広がりという意味で今後も大切にしていきたい点である。
- 4) 学生ボランティアの参加が延べ 47 名あった。特に講演中の託児室の取り組みはその内容と共に保護者様から好評である。また学生からも子ども達とじっくり接する機会として貴重な体験との感想が多い。教育の一環として小児領域のボランティア集団として育てていくことができると考えている。また同様に各講座の受講呼びかけを今後も学生に実施していきたい。
- 5) 来年度は以上述べた諸点の取り組みを更に前進させていきたいと考えている。

### 阪和地域リハビリテーション研究会

実施日：平成 24 年 10 月 25 日～26 年 2 月 11 日  
 場所：大阪河崎リハビリテーション大学  
 統括責任者：寺山久美子（副学長）  
 副統括責任者：阿部真二（河崎病院）  
 古井透（本学 教授）  
 運営委員：山本泰史、末継真子、渡邊拓治、  
 南川真人、久利彩子、稲葉敏樹、  
 勝山隆、平本憲二、石川健二  
 （アドバイザー）村川浩一  
 事務局担当：中務朋子

〈本年度のテーマ〉

地域リハビリテーションの立場から大規模災害の備えを考える

大阪河崎リハビリテーション大学 阪和地域リハビリテーション研究会（地域リハビリテーションセンター）は、故河崎茂前理事長と故山本和儀教授の二人の熱い思念のもと、2007年に始まった。現場で汗を流すスピーカーたちが今の実情を「勉強会」で話しあい、また全国的な取り組みや新しい世の中の動きについては年に

1回の研究会で情報提供・地域啓発を行い、本学の周りで働いたり、学んだり、生活する人々を巻き込んできた。

阪和地域リハビリテーション研究会は現在の研究センター規約を整備中であるが、2012年度から2013年度にかけては「大規模災害への備え」を主なテーマに自己学習・地域啓発のため、外来講師を依頼した研究会2回と、学内教員と地域を代表する外来講師の講演による勉強会3回（うち1回は失語症のケース検討会）の5回の会議を開催した。

その中でも、2012年度から2013年度にかけて、本学で開催された「大規模災害への備え」に関する一連の自己学習・地域啓発事業4回の会議の期日・講師・題目・参加者の概略を下表に示す。

〈本年度事業のまとめ〉

どんなに年をとろうと、障がいを持とうと、住み慣れた地域で安全に、安心して生き生きとした生活を送りたいのは、万人に共通した思いで、これを具現化していくことが地域リハビリ

開催日	講師	題目	参加者 (うち外部参加)
平成 24 年 11/25(日)	香山 明美 先生 (宮城県立精神医療センター)	災害とりハビリテーション ～作業療法士の立場から支援の 在り方を考える～	72 (13)
	半田 一登 先生 (日本理学療法士協会 会長)	災害とりハビリテーション ～もしものことが起こったら～	
平成 25 年 7/28(日)	村川 浩一 教授 (大阪河崎リハビリテーション大学)	地域包括ケアシステムにおける連 携・ネットワークの課題 —地域防災を中心に	83 (18)
平成 25 年 10/28(日)	高笠 忠士 先生 (貝塚市都市政策部 危機管理課 課長)	災害時の支えあいに向けて —貝塚市災害時要援護者 避難 支援計画—	69 (28)
平成 26 年 2/11(火)	延生 秀男 先生 社会福祉法人 延寿会 ふれあい 二色の浜 事務長	地域ぐるみの防災への取り組み	50 (24)

テーション活動の目的といえるだろう。だが2011年3月11日、東日本大震災が起こった。翌年の本研究会で、震災後の支援活動に尽力されてきた半田一登先生（日本理学療法士協会会長）、香山明美先生（日本作業療法士協会理事）の2名の講師を招き貴重な体験談も交えた講演をいただいた。2013年4月からは地域防災と高齢者・障がい者支援について全国調査の経験もある村川浩一教授を新たに迎え、7月には「地域包括ケアシステムにおける連携・ネットワークの課題—地域防災を中心に」と題した勉強会で全国の先進事例を聞くことができた。さらに、本学が連携契約を交わした地元貝塚市は、全国に先駆け災害時要援護者避難支援計画を策定した国も注目する自治体であった。そこで計画の詳細について、今年度の研究会事業として、2013年10月27日に貝塚市都市政策部危機管理課課長を招き、第4回阪和地域リハビリテーション研究会を実施した。これは近隣住民や大阪府下の専門職能団体の災害担当の方など各方面か

らも関心を呼び、多様で多数の参加者があり地域に根付いてきたことが実感された。2014年2月には実際の貝塚市民の立場での地域ぐるみの防災活動についての実践報告の勉強会を実施した。これら一連の「大規模災害への備え」の自己学習・地域啓発の取り組みで、地域や外部からの参加者は確実に増加し、本会は地域に根をはりつつある。「今、ここで」の地域リハビリテーション活動の方向について、本会や大学の役割はかなり可視化しつつあるのかもしれない。

これまでの勉強会、研究会において、有事の際にリハビリテーションの視点から「何ができるか」、「何をすべきか」を明確にすること。そして、それらを周辺地域に周知しておくこと。これらを事前に行っておくことが有事の際に効果的な支援活動を推進するために必要であることを学んだ。そしてこれは将来の災害に備えるという点で、今から取り組むべき課題と言うことができる。

（文責：古井 透）



研究会の様子

### 第3回精神科リハビリテーション研究 センター研修会

実施日：平成25年10月5日  
テーマ：高次脳機能障害に対するリハビリテーション  
場所：大阪河崎リハビリテーション大学  
世話人：村西 壽祥（世話人代表）

精神科リハビリテーション研究センターは、平成23年よりリハビリテーション医療、臨床研究、研修会等の学術活動を行うことを目的に、医療法人河崎会水間病院と本学の協定により設置された。本センターでは、水間病院での精神科リハビリテーションの医療・研究を中心とした活動を行っているが、近年の精神疾患や認知症においては、患者さんの高齢化の影響もあり脳血管疾患等の合併は増加傾向にある。精神科リハビリテーションに関わる理学療法士・作業療法士・言語聴覚士やその他の医療職においては、精神疾患だけでなく、合併する疾患や障害に対する知識や各専門職の専門性を理解したうえでチームリハビリテーションを展開することが必要となっている。そのような背景において、本センターでは各専門職がチームリハビリテーションとして関わる疾患や障害への理解を深めるために研修会を開催している。

このたび、精神科リハビリテーション研究センター第3回研修会では、「高次脳機能障害に対するリハビリテーション」をテーマとし、高次脳機能障害である失語・失行・失認と各専門職の専門性を理解・共有するために3名の先生にご講演をいただき、高次脳機能障害患者への関わりや連携について討論会を企画した。脳血管疾患による様々な障害の1つである高次脳機能障害は、脳血管疾患患者のリハビリテーションの中でも難渋することの多い障害である。高次脳機能障害に対するリハビリテーションでは、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士による専門性を発揮することはもとより、患者の問題を共有したチームリハビリテーショ

ンがより重要になるといえる。

研修会に先立ち、精神科リハビリテーション研究センターのセンター長である本学言語聴覚学専攻教授亀井一郎先生にご挨拶をいただき、脳外科医として高次脳機能障害に対するリハビリテーションの重要性と我々専門職への期待についてお話しいただいた。研修会では、言語聴覚士の立場からとして、大阪大学医学部附属病院の浮田弘美先生より「失語」についてご講演いただいた。次に、作業療法士の立場からとして、本学作業療法学専攻准教授高野珠栄子先生より「失行」についてご講演いただいた。最後に、理学療法士の立場からとして、琴の浦リハビリテーションセンターの中尾和夫先生より「失認」についてご講演いただいた。

講師の先生方からは、障害に対する正しい理解や障害に対するアプローチについて具体的な講演をしていただき、それぞれの専門職が何をどのように考えているのか、専門性の理解と共有により、高次脳機能障害をもつ患者さんのリハビリテーションアプローチとして深い学びの場となった。研修会の最後は、3人の講師の先生方を交え、活発な討議で研修会を終えることができた。

今回の研修会には、本学学生と教職員、河崎グループの関連施設の理学療法士・作業療法士・言語聴覚士、看護師等の関連職種を含め98名の参加をいただいた。参加した学生にとっては、将来目指すべきそれぞれの職種の専門性と連携の重要性について、多いに学ぶ機会となったのではないだろうか。



研修会受講風景